

ごちゃまぜ（混合）の魅力で都市に活力を

大阪大学大学院国際公共政策研究科

教授 林 敏彦

1999.4.6 第 411 回定例朝食懇談会

社会潮流

かつて、都市というものは人々が勝手に入ってくるものだった。そのため、都市は人口の増えすぎを問題にしてきた。秩序だって徐々に人口が増加すれば問題は生じないが、人口の増加が速すぎるとインフラの整備が追いつかないからである。ところが、少子高齢化で2010年代をピークに人口が減っていくことになり、都市も今後は人口が減少していくという現実と直面することになる。

そういう意味で、震災を受け人口が減った神戸は先進地域だといえる。神戸市の復興にとって1番の課題はどのように人口を取り戻すかである。雇用を確保し、住みたいまちにしなければならない。つまり、大都市が減った人口をどのように回復するかを考える最初の事例になったわけである。これから日本中の都市でこのようなことが起こってくるだろう。大阪もこれから人口が増えないことを前提に都市像を考えなければならない。

人口が減るのは困ったことだというのは行政の発想で、人口が減少するのはそれほど悪いことではないという考え方もある。過密が解消され、落ち着いたまちをつくる絶好のチャンスとなりうるからである。日本全体として人口が減るのだから、少々人口が減っても心配ない都市をイメージすべきではないだろうか。

また、現代は、大量消費社会の終焉を迎えたといわれている。すなわち、大量生産、大量消費、大量投機、多エネルギー消費が経済成長であり生活水準の向上であるという時代が終わったというわけである。しかし、私はこれには疑問をもっている。なぜなら、長い歴史をみると必ずこのようなことがいわれてきたからだ。1930年代のアメリカの大不況のとき、当時の経済学者にやはり構造的な不況論を唱えた人がいる。第1次世界大戦後のベビーブームが終わり、少子化で人口が減った。少子化を当時、「赤ん坊の不作」(Baby Crop Shortage)と呼んだ。アルビン・ハンセン氏は、高齢化でサービス産業化が進み、設備産業が衰退するという長期的展望で、アメリカは長期停滞期に入ったと診断した。1920年代をリードした耐久消費財ブームが終わりを告げたが、その典型が自動車だった。自動車は大量生産により大衆化したといっても中産階級のものだった。それが中産階級にいきわたり、自動車のマーケットは飽和したといわれた。少子高齢化、技術革新の一巡、フロンティアの消滅、自動車産業の需要飽和で、アメリカは永久に立ち直れないというのが当時の悲観論である。

しかし、今のアメリカの自動車産業はますます元気で少子高齢化も忘れている。このように大きな歴史の流れからみると、大量消費社会の終焉も半世紀後には過去のものになっているかもしれない。ただ、地球規模でのキャパシティが問題になってきていることが昔と違う点である。

一方でグローバル・コンペティションがますます激化している。これは産業だけではなく都市機能もグローバルに競争するようになったためだ。例えば、神戸港は震災の前から貨物の取扱量は世界の4番目に落ちていた。港も香港、シンガポール、釜山などと競争しているのである。空港や産業立地でも競争している。都市間競争に勝った都市に人やものやお金や情報が集まり、楽しいまちができる。一方、大量消費社会に別れを告げ、人口が減っても気にせず、エコロジーに気を配り、年寄りに優しいまちづくりを目指すところもあるが、世界の競争に負けてしまうという問題が生じる。

また、個性化、多様化という潮流がある。都市イメージにも個性が必要になってくる。中央からの補助金でまちづくりをしようとする、補助金が出る仕様にしなければならぬのでどこでも同じようなまちになってしまう。神戸でも六甲アイランド、ポートアイランド、芦屋浜の人工島は皆似ている。補助金を得るためにはそうせざるを得ない。神戸の復興の際も、同じようなプレハブ住宅が建てられた。プレハブは震災に強く安くて丈夫で、ニーズに合っており、効率的に住宅地は復興した。

しかし、全く個性のないまちとなった。失礼ながらプレハブメーカーも何十軒というプレハブが一ヶ所に建つことを想定していなかったのではないだろうか。

企業ではコア・コンピタンスといわれている。個性豊かなところが人を集めるにも強い。ほかより安いというだけでは迫力がない。都市も競争するときに「よそより能率が良いですよ」では不十分で、風格、個性、イメージなどが重要である。

将来像の基本理念

大阪の将来像に対して私と大阪府の方でキャッチフレーズをつくった。「働き、遊び、学び、ふれあう。夢がひろがる大阪元気」。大阪府がまちの将来像に対してアンケート調査をしたところ、1番多かったキーワードは「夢」だった。今、大阪の人がまちに1番求めているのは夢である。そして、「働き、遊び、学び、ふれあう」というのは都市の機能である。雇用があって、働いたら遊ぶ。最近、日本では遊び心がなくなり、ムードが暗くなってしまった。特に関西のリーダーの方々には遊びがなくなり、まじめすぎるのが気にかかる。

兵庫県が震災復興のための10年計画をつくった。そのとき、がれきの撤去から産業復興まで660のプロジェクトを全部リストアップした。どれも大事で必要なものばかりだが、大事で必要なまじめなものばかりを660も並べると陰々滅々たるものになる。それは遊びがないからである。遊びもまちづくりには必要だということも震災の教訓の1つであ

る。

危機管理や都市計画や住宅の設計にリダンダンシーという思想が取り入れられるようになった。リダンダンシーとは冗漫、不要なもの、ダブっているものということである。ぎりぎりの効率を追求しているものは危機に弱い。リダンダンシーのあるところはある種の柔構造を示し、無用の用をなす。無駄と思われていた空間だ、震災のときには人がそこに集まって助かったというようなことになる。長い目で見たときに一見無駄のようにみえるものをちりばめておくことが重要になる。

ヨーロッパの19世紀の都市は、浮浪者が溢れ、道はぬかるみ、衛生状態が悪く、犯罪の巣くつだった。人が集まるとこのような状態になる。それでも人が都市に集まったのは都市が自由だったからである。魅力があるから人が集まったのだ。20世紀の都市は道路、学校、住宅を整備して都市の生活が快適になるように工夫を凝らし、集まった人間にアメニティを提供しようとした。20世紀後半は近代主義でビジネスに暮らしに効率が良いまちの配置を考えた。今度は利便性を求めて人が集まってきた。そこで、21世紀の都市は何を提供するのかというのが大きな課題となる。

20世紀の都市はゾーニングにより効率を良くした。市が中心になって、住宅ゾーンや商業ゾーン等、目的別に都市計画を行ってきた。このようなまちをプランテーション型のまちと呼ぶ人もいる。プランテーションは計画的に土地利用を考えて作物を植える。こうして効率的で機能的なまちを築いてきたが、こうした開発のため居住地域から工場地帯までの通勤が必要となった。そこで交通が整備されてきた。

ところが、これからの都市は機能オンリーでいけるのかという問題がある。遊びの次ぎに「学ぶ」をもってきたが、これも重要である。大阪は大学を環状線の外側へ追い出してしまった。都心に若い人が集まらなないと嘆いているが、大学を元に戻したら若い人が集まると思う。私の大学院の国際公共政策研究科は学生数約160人のうち43パーセントが社会人と留学生である。社会人の方は学習意欲が高く博士を取りにこられる。文科系の博士など役に立たないという見方が多い。というのも、元の文部大臣が、国立大学の先生が企業にサービスを提供するのは良いことだが、それは理科系に限ると言ったり、郵政省の研究所で博士を採用するのに理科系は任意で採用できるが、文科系は公務員試験を受けなければならない等がこの表れである。しかし、私のところにこられる社会人の大学院生はライフワークをまとめたいとか勉強したいという意欲が高く、博士課程の志願者は定員の2.5倍を超えている。

私は「デジタル社会の法と経済」という講義を担当しているが、ゲストスピーカーを次々に招き、学生の人気非常高い。NTTの分割問題が審議会にかかっていたころ、NTTの論客やDDIの方を呼んでそれぞれの立場を話してもらった。学生たちは非常に興味をもってくれた。そういう面白いことが大学で起こっている。

外からの血で元気に

「夢がひろがる大阪元気」だが、今、大阪は元気がない。私の同僚の宮本又郎は経済史の大家だが、彼は大阪というまちは外からの血が入ってきて元気になったと言っている。例えば、江戸時代には近江商人が入ってきて大阪のまちが栄え、明治には薩長土肥の人が入ってきて栄えた。阪急電車ももともとは関東の人がつくった。中にいる人だけで考えているとどうしても沈滞する。そこで、どれだけ外の血を呼び込むことができるかが重要になるが、呼んできただけでは駄目で、活躍の場を与えなければならない。大阪はよそ者に活躍させることが上手で、沈滞するたびに外からの血が入ってきて元気を取り戻した。それに比べ京都はそれが下手だった。京都は閉鎖的で本心を見せないところがある。大阪はもともとマーケットのまちで氏素性にこだわらなかった。

ところが、最近そういう力が落ちてきたようだ。かつては、韓国等からやってきた新しいメーカーでも、安くて良い製品であれば大阪ではぱっと売れた。それが今では、何人も紹介者を頼らないとなかなか商売ができないというようなことが起こっている。アメリカでは良いものなら店開きするとすぐ売れる。消費者も飛びつくし、ビジネスコミュニティがすぐに正当なビジネスとして処遇するのである。JPモルガンをリタイアした人が、出資者を募るための投資案件に関する書類をインターネットを使って配布するというベンチャーを起こした。コストが3分の1になるというので出資を求める企業のお客さんがすぐに集まった。ビジネスコミュニティがすぐ認めたというところがすごいと思う。まちの外からの血を大事にしなければならない。

ごちゃまぜの論理

プランテーション型に整然と区画整理されたまちは、21世紀のまちではないような気がする。古くから職住近接ということは言われてきたが、もっとごちゃごちゃになっているのが良い。例えば、三宮や元町には小さなオフィスがたくさんあり、飲み屋や喫茶店やうどん屋やスポーツクラブがある。あのようなイメージである。このようなごちゃまぜの中に人、しかも年寄りが住んでいるまちが良い。65歳以上の人の90パーセントぐらいは元気でお金を持っている。これは資源であり、活用しないと損である。

都心をセントラル・ビジネス・ディストリクト(CBD)というが、これはビジネスの中心のいかにも20世紀的な都市を指す。しかし、これからの都市は人が集まる理由が変わってくる。今は仕事や生活の利便性・効率を求めて集まっているが、通信の発達でどこにいても仕事ができるようになる。大学の図書館の本が電子化されてどこからでもマルチメディアで見られるようになり、授業も衛星放送などでどこでも受けられるようになれば、大学にも人が集まる必要はなくなる。やがて大学へ行くのは人と会うためということになるだろう。同様に、都市も人と会うために集まる場所になる。森林浴という言葉があるが、今、社会学者の間では「人間浴」という言葉が使われている。人は人間浴をするた

めにまちに行くようになるのではないか。すなわち、コンピュータに乗らない部分のコミュニケーションを人間浴に求めるのである。

そういう都市は機能に純化された場所の寄せ木細工ではなく、そこでいろいろな機能が混ざっている。そしていろいろな意味でボーダーがなくなっていくだろう。企業も、社外で仕事をする人が増えてくると、社員と社外の人との区別がはっきりしなくなる。大学も社会人が多くなれば学生と社会人のボーダーがなくなる。ごちゃまぜになりプランテーションからジャングルになっていく。いろいろな人がミックスして助け合い、活力が生まれる。

最後に、ごちゃまぜとは庶民のまちでもあり一流の人も集まるまちである。大阪は庶民のまちと言い過ぎて一流を大事にしなかった。今、超一流の人たちが大阪に住みたいと思うだろうか。これから大阪は超一流も大事にしてほしい。